君と一緒に

神崎　煉夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と一緒に

【Ｎコード】
Ｎ９４９１Ｕ

【作者名】
神崎　煉夜

【あらすじ】
俺こと春日拓也（かすがたくや）は平凡な学校生活を送っていた。幼なじみの可奈や香織とか女友達もいて、そこそこ平凡な学校生活を楽しんでいた。
でも、二学期から俺の生活は一変する。両親の事故死。
大好きだった母、気難しかったが優しかった父。その二人を失い俺の心はズタズタに引き裂かれた。

プロローグ（1）

ーージリリリリリリ。

俺はうるさい目覚まし時計を叩き止め、ベットから起き上がる。カーテンから眩しい程の太陽の光が溢れいて、部屋を明るく照らしている。

夏休みは終わり、今日からニ学期である。まだ残暑の残り、暑さで寝巻は汗で湿っていた。

俺は一度大きく欠伸をし、目を擦りながらつい呟いていた。

「……眠い」

いつも思うが、学校はなんで朝早くにあるのだろう？

俺は跳ねているであろう寝癖を手で直しながら考え込む。これは朝が苦手な俺達学生をイジメるための……政府の陰謀だ。

「拓也、朝ご飯よ」

一階から母さんの呼び声が聞こえ、馬鹿な考えをやめることにした。うちの母さんはいつも同じ時間に呼び起こしてくれる。

なぜなら俺は朝が弱く、すぐに二度寝をしてしまうからだ。

今だって無意識に首がフラフラと左右に揺れて、ベッドに倒れ込もうとしていた。

「……わかったぁ～」

俺はなんとか睡眠という欲求に辛勝し、白いカッターシャツに袖を通して紺色のズボンを穿く。通っている青陵高校の夏服に着替え終わった。

最後に赤いネクタイをキュッと締め、未練がましくベッドをチラ見しつつ俺は部屋を後にした。

「おはよう、拓也」

「おはよう」

「父さん母さん、おはよう」

リビングに入るなり、母さんと父さんに挨拶をするのが日課だ。父さんは椅子に座り、いつものように仏頂面で新聞を読んでいた。親ながらなんでいつも気難しい顔をしているんだろう。ある意味顔が母さん似でよかった。

「裕也、早く顔を洗って来なさいほらほら、寝癖も直して」

「わかってるよ」

俺は洗面所で顔を洗って寝癖を直し、リビングに戻りいつもの椅子に座る。

母さんは茶碗にご飯を盛り、テーブルに持ってきて置いていく。やはり家族揃って食べるご飯は楽しい。俺はご飯や焼き魚を頬張っていた。

「そうそう拓也、今日帰るの遅くなるから」

今日？　母さんは特にパートなどはしていない。なんかあったから？

「まぁ、あんたには関係ないけど今日は結婚記念日だから。今日は父さんとディナーに行くのよ」　と物凄く嬉しそうに語る母さん。父さんもいつもの仏頂面ではなく、カレンダーをガン見していた。

わかりやすいよ……父さん。

以外には二人はまだまだラブラブらしい。最近は離婚問題が多いいから子供としては安心する。

そのあと、俺は嬉しそうにニコニコする母さんに見送られ学校に向かった。

「拓ちゃん、おはよう」

「おはよう、加奈」

登校は家のご近所さんである、クラスメート兼幼なじみの白河加奈（しらかわかな）と行っている。可奈は笑いながら返してくれた。

今日も加奈は玄関の柱にもたれて、いつものように俺を待ってい

てくれたようだ。
「ほらほら拓ちゃん、早くしないと学校に遅刻しちゃうぞ！」
腰まで伸びた茶髪を揺らしながら、加奈は俺の腕に抱き着いてくる。ほんのりと膨らんだ胸の感触についにやけてしまう。
可奈の髪は寝癖みたいにぴょんぴょんと跳ねている。聞いたところくせ毛らしい。
それがとても可愛い。
「それじゃあ、拓也さん。加奈をよろしくね」
「わかりました」
加奈のお母さんは玄関の前で、いつも微笑みながら手を振りって送り出してくれる。
「お母さん、行ってきます」　加奈も元気よく手を振り、学校に向かった。加奈が手を振るときに赤色のチェック柄のスカートから、白い下着がチラッと見えたのは俺だけの秘密だ。

登校途中に黒髪のセミロング姿の香織（かおり）が電柱にもたれ掛かっていた。
「いつも熱々だねぇお二人さん」
明石香織（あかいしかおり）は溜息混じりにニヤニヤと可奈を見ながら言ってくる。
俺のクラスメートの香織は加奈の親友であり、いつも同じ所で待っていて話し掛けてきている。
「違うよ、熱々じゃないよ。それに、拓ちゃんとはそんな仲じゃ……ないし」
顔を真っ赤にして加奈は否定していた。そこまで否定されると俺としても凹んでしまう。　「あらあら？そんなに落ち込まないの拓也。なんなら私と付き合っちゃう？」
香織は腰を少し曲げ、挑発的に上目遣いで俺を見つめてくる。
「香織ちゃん」
「あれ？加奈は関係ないじゃないの？」
クスクスと香織は笑い出す。明らかにからかっているのがわかる

が、俺と香織の顔は赤かった。　それから俺達三人は、たわいもない話をしながら青陵高校に登校した。

青陵高校はごく普通の高校で、特に目立った物もない。つまり、言ってしまえば特に面白くない学校だ。まぁ敷いて言えば行事が楽しいくらいなものだ。

俺は家から近いからここを選んだ。

俺は二年一組で、香織と加奈も一組。クラスは３０人の四クラスあり、これまた普通だった。

８時４０分からＨＲを始める。　俺達一組の担任の櫻井莉子（さくらい りこ）は、女の先生で国語の教師。日本人らしい真っ黒な髪の毛で、清潔感溢れるショートカット。とても優しい先生だが、俺からしたらあまり頼りにならない。

「ようし、今日も張り切って行きましょうね」

「はぁい」

莉子は拳を振り上げ、生徒達に微笑みながら元気な声で激励する。それを俺以外の人も元気に返していた。

俺だけは無愛想な顔で莉子を見ていた。

「あ、たー君。また無視したぁ～」　莉子は俺の事をたー君と呼んでいる。俺と莉子は従姉妹同士。俺としても、たー君と呼ばれてもいいのだが、学校ではその呼び方は止めて貰いたい。

まぁ普段からも辞めていただきたい。

莉子は教卓から身を乗り出し、最前列かつ中央の俺にぷんぷんと怒りだす。これは毎日のことで、「また痴話喧嘩してるね」とクラスメートはクスクスと小声で笑っていた。

俺からしたら、またアホなこと言ってる程度しか思わない。

「もう、たー君。無視しちゃ嫌だよ」

涙目でそんな事言われても困る。とりあえずこの空気をどうにか

しないと……

「あっ櫻井先生、チャイム鳴りましたよ」

「え？　本当？　やばいよ、授業に行かないと……じゃあ、皆今日も頑張ってね」

莉子は慌てて教室を出ていく。廊下を走る音が教室まで聞こえた。

ちなみに、まだチャイムは鳴っていない。クラスメートは莉子の慌てぶりに吹き出していた。

それほど天然でドジっ子なのだ。よくあれで教員になれたな……。

「拓ちゃん、あんまり莉子さん虐めないの」

「あらぁ、加奈は櫻井先生を庇うんだ。拓也には怒って」

加奈と香織は莉子が出ていくなり、俺の席に集まってくる。

「え、ち、違うよ。拓ちゃんを怒ってるんんじゃなくて……その……ね」

「なら、なあに？」

「え、えっと……」

香織はあわてふためく加奈を弄って遊んでいた。

本当にチャイムが鳴り、香織と加奈は急いで自分の席に向かって行った。担当の先生が教室に入って来て授業が始まる。

授業では特に何もなく、眠たい授業が終わり、昼ご飯の時間になった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9491u/

君と一緒に

2011年10月9日20時15分発行